鴨稲荷山古墳

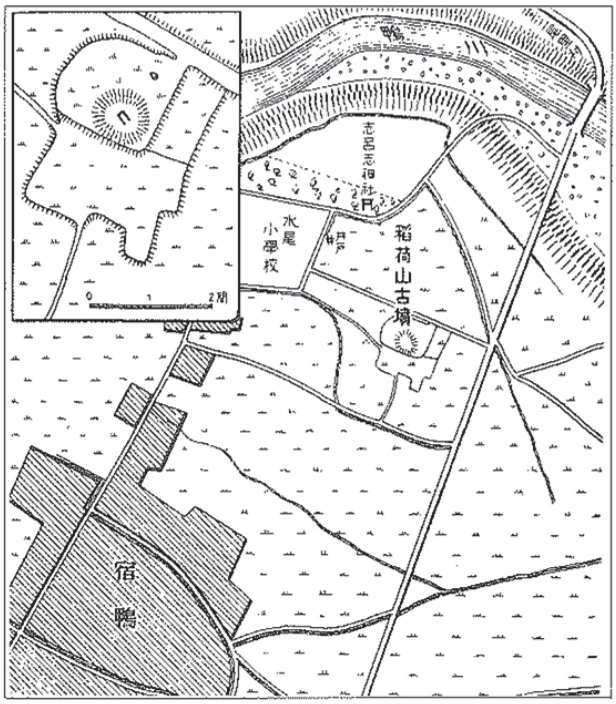
稲荷塚の発掘

高島町歴史民俗資料館より北へ150ｍ行くと、滋賀県指定史跡稲荷山古墳が所在します。

古墳の発掘は、明治35年に古墳の東側を通る上街道が県道に昇格し、改良工事の際に工事用の土砂が必要となり古墳の盛土を取りはじめたところから始まります。

明治35年８月９日、稲荷塚と呼ばれていた稲荷山古墳の墳頂より立派な石棺が発掘され、翌10日に石棺の蓋石がはずされて石棺内部が検査されました。石棺内は、真赤な朱が塗られ貴重な副葬品が所狭しと置かれていたようです。出土品の中に金製の耳飾が認められ、被葬者が貴人であると考え厳重な管理をしたと伝えられています。

鴨稲荷山古墳の本格的な学術調査は、大正11年と12年に京都帝国大学考古学研究室の手



鴨稲荷山古墳の位置図

大正時代の調査風景

によって実施され、調査報告『近江国高島郡水尾村の古墳』としてまとめられました。この報告書は以後の古墳調査の基本文献となり稲荷山古墳の重要性を学界に示すことになりました。

稲荷山古墳の概要

稲荷山古墳は、発見当時の土取り工事によって原形を大きく変えていますが、本来は全長約45ｍ以上を有する前方後円墳で墳丘には埴輪を立て並べていたようです。また、主体部は後円部に設けられ、南東方向に開口した横穴式石室に古式の家形石棺を安置していました。今日では、家形石棺と墳丘の一部しか残されていません。

古墳から出土した副葬品で特に注目すべき点は、金製耳輪及び垂下飾、金銅製冠、金銅製沓、金銅製雙魚形珮飾、鹿角製柄頭附鉄大刀、金銅製拵環刀鉄大刀などの金銅製品が多く副葬されている事です。副葬品は装飾品類、利器類が石棺内に納められ、馬具類、土器類は石棺外に置かれるという取り扱いがなされていました。

家形石棺の石材は、凝灰岩です。この家形

1990．４．10

財団法人　滋賀県文化財保護協会

石棺について、倉敷考古館の間壁忠彦氏らのX線回折分析の結果、大阪と奈良の境に位置する二上山から産出する白石であることが判明しました。この種の石棺が、畿内でも和泉、摂津、山城にはなく、遠く近江の高島の地に運ばれてきていることは稲荷山古墳がいかに特異性のある古墳であるかうかがえるものです。

古墳の年代については、出土した須恵器から6世紀前半と判断されます。稲荷山古墳の石室については、道路工事の際に壊され詳しくはわかりませんが残存部分の調査によって横穴式石室であることが判明しており、日本に横穴式石室が朝鮮半島から導入された時期よりすこし新しい位の時期です。また、この古墳には周濠が掘られ、まさに、高島の開発者としての偉容を備えた墳墓といえましょう。

鴨稲荷山古墳と藤ノ木古墳

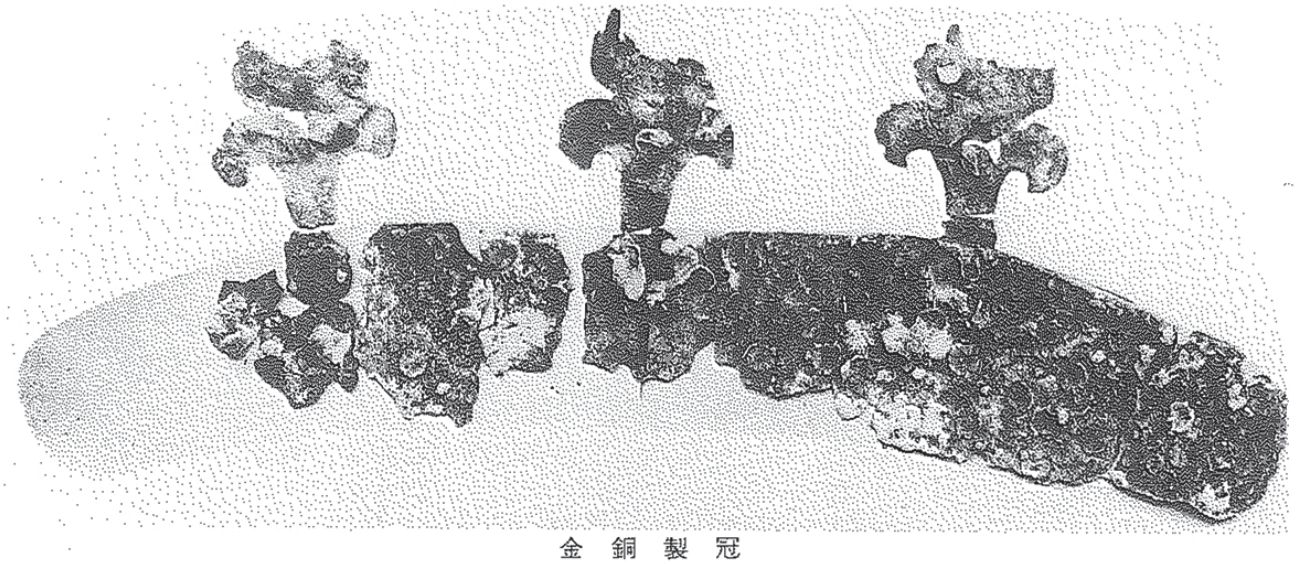
高島町所在の稲荷山古墳は現在所在地の大字である鴨を取って鴨稲荷山古墳と呼んでいます。その理由については、全国に約20数万基以上の古墳が存在しますが、その内稲荷山古墳と呼ばれる古墳は多く存在し、特に有名な古墳として、群馬県藤岡市白石稲荷山にある白石稲荷山古墳、埼玉県行田市埼玉にある埼玉稲荷山古墳、福井県福井市足羽山にある足羽山稲荷山古墳、熊本県熊本市清水町にある打越稲荷山古墳などがあり、それらと混同

鴨稲荷山古墳出土遺物

種類	品名	数量
装飾品	金製耳輪及び垂下飾	1対
	金銅製冠（残欠）	1個
	同　沓（残欠）	1足
	同　三輪玉形飾具	7個
	同　半円形小飾具	6個
	同　隻魚形珮飾（残欠）	2個
	同　半筒形飾具および雑金具(残欠)	5個
	水晶製切子玉	28個
	玉髄製切子玉	14個
	琥珀製棗玉	12個
	銅　鏡（残欠）	1面
	銀製金具（残欠）	1個
利器	鹿角製柄頭附鉄太刀	2口
	金銅製拵環頭鉄太刀	1口
	鹿角製柄鉄短刀	1口
	鉄短刀（残欠）	1口
	鹿角製柄鉄刀子	8口
	鉄斧類	2口
	鉄製石突	2個
馬具	金銅製鞍飾具	1具分
	鉄製輪鐙（残欠）	1個
	鉄地金銅張飾板附鉄轡	1個
	同　杏葉	6個
	同　雲珠	6個
	銅　鈴	3個
	鉄製小環および鏡具	4個
土器	陶質大形器台	1個
	同　（残欠）	2片1個分
	陶質壺	2個
	同有蓋台附壺	1個
	同高坏	1個
	同吹壺（甑）	1個
	埴輪円筒（破片）	数個

『近江国高島郡水尾村の古墳』より作成

鴨稲荷山古墳出土遺物



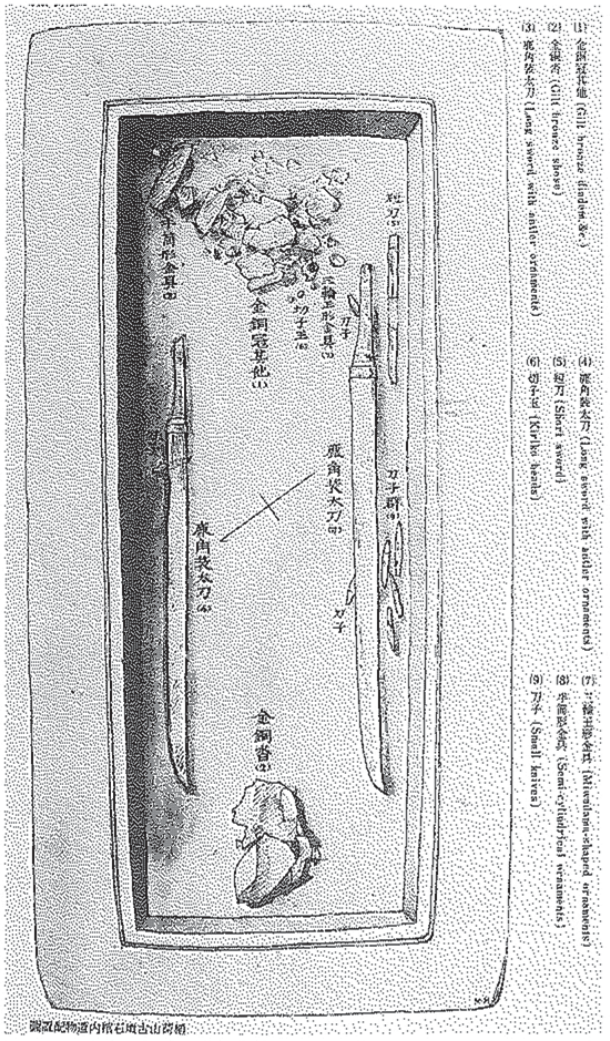
金銅製冠

しないために大字の鴨をとり鴨稲荷山古墳と呼び慣わすようになったものです。

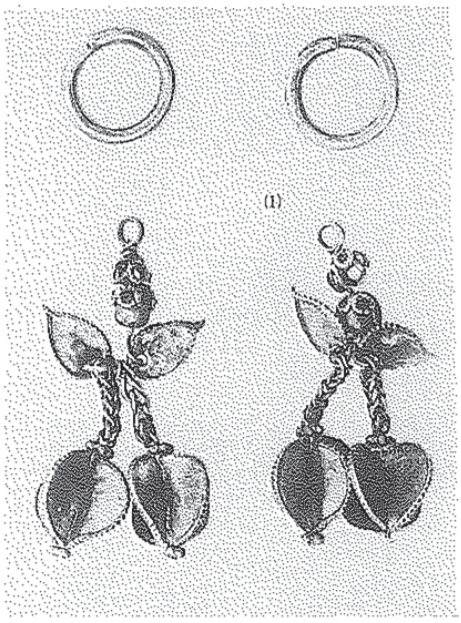
昭和60年秋、奈良県斑鳩町でひとつの古墳が発掘されました。その古墳の名は藤ノ木古墳です。藤ノ木古墳は石室が開けられ中に入ると、玄室の奥に朱塗りの石棺が安置されていました。それも未盗掘で埋葬時のままの状態でした。藤ノ木古墳の調査によって、同時期のよく似た古墳は他に存在するかというところに興味が注がれ、畿内周辺で未盗掘の石棺として、約80年前に発見された鴨稲荷山古墳が俄然注目されるようになりました。

つづいて、昭和63年10月８日に未盗掘の石棺の蓋が開かれました。それは、鴨稲荷山古墳の石棺が開かれた時を彷彿とさせるものでした。

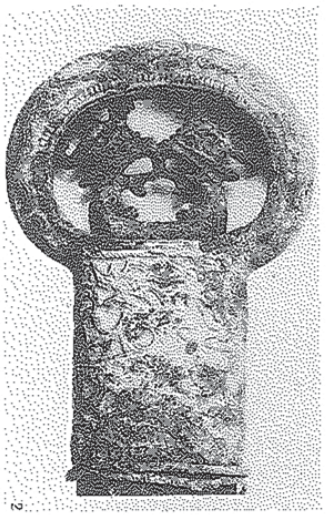
藤ノ木古墳の石棺内には、金銅製冠、筒形金銅製品、金銅製履、獣帯鏡、耳飾り、ガラス玉、玉纏大刀など数えあげるときりがないくらいに多くの副葬品が納められており、わたしたちを驚かせました。



鴨稲荷山古墳石棺内遺物配置図

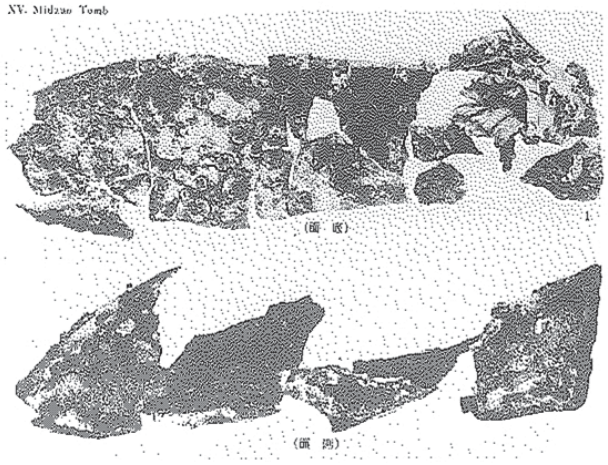


金製耳輪及び垂下飾



金銅製拵環刀鉄太刀

金銅製雙魚形珮飾



金 銅 製 沓

まさに、藤ノ木古墳の発掘は六世紀代の首長墓級の墳墓として今後の貴重な資料となるでしょう。あわせて、同じような副葬品を有する鴨稲荷山古墳も近江の六世紀代を考える際に欠くことのできない古墳といえましょう。つぎに、鴨稲荷山古墳の被葬者について考えてみることにします。

鴨稲荷山古墳の被葬者

古墳の調査で、だれしもが関心を持つのが被葬者はだれか？との疑問です。被葬者が話題になった古墳に、有名な奈良県明日香村の高松塚古墳があります。また、藤ノ木古墳もその顕著な例です。

ここで、鴨稲荷山古墳の被葬者を考えてみることにします。まず始めに鴨稲荷山古墳の年代は、副葬されていた須恵器より六世紀前半の時期です。つぎに古墳の所在する場所ですが、古代では「三尾郷」と呼ばれていた地域です。この三尾郷が鴨稲荷山古墳の被葬者を考えるうえに非常に重要です。

継体天皇について『日本書紀』には、「天皇の父（彦主人王）、振媛が顔容妹妙しくて、甚だ嫩色有りということを聞きて、近江国の高嶋郡の三尾の別業より使を遣わして、三国の坂中井中此をば那というに聘へて、納れて妃としたまう。遂に天皇を産む」とあり彦主人王が三尾に住まいしていたことがわかります。ところが、天皇が幼いころ彦主人王が亡くなったので、母振媛の故郷である越前国高向に帰り男大迹王として成長します。その後、大伴金村が武烈天皇なきあと、応神天皇五世の孫であるところの男大迹王を継体天皇として擁立しました。

継体天皇（450～531）は、畿外北方より進出し尾張、北近江、北河内等の勢力を背景として、仁賢天皇の娘である手白香皇女との婚姻によって皇位を獲得しました。

ところで、継体天皇には数名の妃がおりますがその内に三尾角折君の妹、稚子媛と三尾君堅槻の娘、倭媛がいます。このことは、三尾君氏と親縁関係があったことを示しており、三尾郷に所在する鴨稲荷山古墳は時代的にも近江の三尾君氏の墳墓であると考えられます。三尾君氏の権力は、家形石棺内に納められていた副葬品の豪華なことによっても伺い知ることができるものです。

まとめ

鴨稲荷山古墳の出現は、それまであまり目立った首長墓が見受けられない高島郡内にとって、新しい時代が到来したことを告げるものでした。では、なぜ三尾郷の地に鴨稲荷山古墳の被葬者が現われたのでしょうか？

それを解くには、奈良時代における湖西北部の地勢特色があげられます。ひとつは、八世紀代に北牧野で製鉄が盛んであったことがうかがえること。もうひとつは、鴨稲荷山古墳の位置から南南東へ約４.5kmのところに勝野津と呼ばれる港があり、古来より畿内と北陸を結ぶ交通の要衝であったことです。

これらの要因を巧みに使って勢力を伸ばしていったのが鴨稲荷山古墳の被葬者です。ここに高島の地が、古代において重要であったのかが知られます。

図版は『近江國高島郡水尾村の古墳』より

（白井　忠雄氏　提供）